

# 虚弱ハッカーの暗殺教室

閃刀姫使いアルジェ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

虚弱体質のせいでもーEに来た主人公

天才ハッカーの彼はどのように暗殺教室を掻き回すのか!?

(1話目の時間軸は1学期中間から修学旅行の間)

(お前遊戯王2つ、FGO、ポケモン放って何したいねんって思ったそこの貴方。ごめんなさい)

目次

1 話目 出席の時間

## 1 話目 出席の時間

「今日は皆さんにお知らせがあります！」

「なんだよ先生？」

「ええ、このE組に生徒が1人増えます」

男子のおおつ、と喜びの声が聞こえる反面、何かを察したようにため息をつく生徒もいる。

「ここは普通とは違う教室。」

「先生！先生！女か？女か？」

「多分暗殺者でしょうけどね」

「業君が復帰したばかりなのに…」

「にやにゆ！いい、一気に聞かれても…岡島君、男の子です。それと彼は病弱で、こつちに来た訳ありの生徒らしいですよ？」

今度は女子がおおつ、と声を漏らす。そこあたりは普通の教室なのに。でもどこか異質であるこの教室に今日からボクは通うことになる。

「それでは入ってください。」

黄色の触手生物が嬉しそうに見てくる。そしてボクは笑顔で入る。

「ちっちゃー！」

「渚や茅野よりチビなんじゃねえの？」

「チビとはなんだ！チビとは！」

おおつ、思わず反論してしまった。ボクは身長が低いことがコンプレックスなのだよっ！

「では自己紹介をお願いします」

よしっ！ボクは大人だからね。今さっきのは聞かなかったことにしてあげよう。でも覚えてろよ？寺坂君？

「ボクの名前は神楽 燕。ツバメって呼んでね！」

ああ、ボクの中学校生活はここから始まるんだ…

「失礼、防衛省の烏丸というものだが」

明後日柵ヶ丘中学に復帰することが決まったが、突如防衛省の方がやってきた。何を言っているのかわかんないかもだがボクにも分らん。アレか？ボクが今までやってきたことのツケが回ってきたのか？ごめんなさい！何回か面白そうだったからセキュリティに侵入したこと謝りますからどうか、どうかご慈悲をく!!!

え???違うの？あつ、よかつた………っ!!!自分からバラしてんじゃん！ボクゴヨウされんの!!?

「ごほん、それでなんだが………」

なんでも例の月を破壊した犯人が柵ヶ丘中学の3―E組の教師をやっているらしい。いや、なんで!?

アレっ!?!月破壊したのって……

………ふむふむ？E組に復帰してターゲットを殺すと100億円!?!うわあ…非常に高額………一生遊んで暮らせるのか………?

とりあえず了承したが、色々調べる必要が…アレ？烏丸さん？指がめり込んでます！やっぱりセキュリティに侵入しちやダメですか！これってアイアンクローっていうんじや、イテテテテテ！

—今—

なんてことがありました。ボクは元気です。今は休み時間でみんなが集まってきている。例のターゲット、殺せんせーもいる。しかし、殺せんせー授業うますぎだろ！何故か触手を推してくるけど。

「ねえねえ、ツバメ君って何か得意なことあるの?」

「基本的にコンピュータ関連ならなんでもできるよ」

「ツバメ君って小さいけど身長何センチくらい?」

「………142………」

「どんな子がタイプ?」

「ん………明るい子かな？」

質問攻めにあっているが、ボクは殺せんせーがこちらを少し睨むように見てくるのが気になる。なんだ？ボクやっちゃったか!?

「ズルい！もつと先生に注目してもらっても！」

「かまってるちゃんかよ！」

嫉妬かい！あと、こういうのって転校してきたりしたときのあるあるなんじゃ？

「まあそれは置いておいて、ツバメ君？後で職員室に来てください」

えっ、ボク何かやっちゃった？もしかして昨日防衛省のコンピュータに忍び込んだのがバレた？それとも柵ヶ丘学園のホームページに仕込んだしようなウイルスがバレた!?

「復帰の時のテストについてです」

殺せんせーが顔を赤くして言ってくる。渚君曰くアレは怒っている時の顔らしいけど、心当たりしかないんですが!?

残りの授業も面白かったです。

――放課後――

「まずツバメ君。そこに座りなさい」

殺せんせーが触手の指を椅子の方に指す。ボクは言われた通り椅子に座る。

「まず……ツバメ君。君の成績はとてもいいものです。中間テスト合計点406点ですしね。これはE組の2位になります。ですが、これは一体何ですか!!」

触手を上空で暴れさせて本人は赤くなる。いや、これ何のクトウルフ？烏丸さん、いや烏丸先生頭に手を当ててるんだけど!?

ああ、ボクの成績はたしかにいいかもしれない。いや、いいんじゃないかな？

「声に出てます！それでも、英語6点って!!」

「ごめんなさー！ーい!!!普段からコンピュータ言語使っていると分かるようになるんです!!!」

コンピュータ言語に関連する単語は満点だぜ！（なおそれ以外は全部落とす模様）

「しかもその他の教科オール100点なのがさらにたち悪いっ！ツバメ君は修学旅行まで毎日残ってもらいます！」

「はい……………」

そう言いつつ、ボクは対先生用BB弾を撃つ……………

「おっと、ツバメ君。狙いが定まっていますねえ〜」

「ははっ、今まで使ったことないものを急に使えるわけじゃないですからね。できれば当たって欲しかったですが…」

殺せんせーはそんなボクの言葉を笑って受け止めてくれる。

「ええ、殺せるといいですね。卒業までに」

「ええ、みんなとボクの得意分野で殺してみせます。これから一年……………きつてますね。まあよろしく願います」

ボク、神楽 燕は本日、3-E組、暗殺教室の一員となりました。

「あと、学校にノートパソコンを持ってくるのはどうかと……………」

「ぴえっ!?ダメですか!?あとタブレット3台にスマホ5台あるんですけっ…」

「……………」